

Macbeth における特異性

Peculiarities in *Macbeth*

山畑 淳子

YAMAHATA Atsuko

It is generally agreed by Shakespearean scholars today that *Macbeth* was probably performed first at Hampton Court in the summer of 1606 before King Christian of Denmark and James I. It is a sophisticated but peculiar play with ambiguous elements and, as an extremely short play, it is an elegant Jacobean construction. It includes some brief spectacular performances, dumb shows and scenes of witchcraft. Besides these theatrical circumstances, the work contains legal terminology, the idea of illness, and the idea of portents and demonology. Within the play itself, we take a careful look at Lady Macbeth, who seeks control over her husband in the patriarchal society of the time.

The purpose of this paper is to consider *Macbeth* by looking carefully into the play and its theatrical environment. Through a careful examination of the structure and by an analysis of the imagery of spectacles and witches, this paper argues the meaning and the position of this outstanding work in the long flow of Shakespeare's dramaturgy.

I

Macbeth は、洗練された多くの点で特異な劇であり、台詞も占星術用語や医療用語、法律用語やその縁語が使われ、多義的で読みにくい箇所もある。また、第4幕第1場で *Macbeth* が魔女に見せられる8人の王の幻影や、*Macbeth* が最初の罪の前に目にする、誘き寄せる短剣の幻影など、默劇やスペクタクル的要素がプロットの進展に沿って高度に取り入れられている。また、こ

の芝居自体、James 一世が義弟のデンマーク王を招いての御前上演の際に初演されたと一般的に考えられており、国王一座としての特別な作劇術がこの作品に反映されていると考えられる。さらに、James 一世の悪魔学への傾倒ぶりがなければ舞台に乗せにくい要素のある、宗教的にはタブーな面も含むと考えられる呪術を使う魔女の舞台化や、魔女の予言を担ぎ、夫を支配しようとする Macbeth 夫人のあり方、生き方も当時の当時の家父長制の中ではかなり特異で異端な要素であると考えられる。

本稿では *Macbeth* における特異な点について考察し、これらの要素がどのような意味を持つのかを、作品の内部と、この作品を取り巻く演劇的状況から探り、それが Shakespeare の長い劇作術の中でどのような意味と位置づけを持つ劇であるのかを考えてゆきたい。

II

まず、この作品の異彩を放つ、スペクタクル的要素を印象づける個所から考察してゆきたい。劇の幕開きから雷鳴と稲妻の中、魔女が3人登場し、グロテスクで摩訶不思議な空間を演出する。魔女が3人、コーラスのように“Fair is foul, and foul is fair: / Hover through the fog and filthy air.” (I. i 11-12) と、謎めいた台詞でこの場を締めくくり、霧とよどんだ空気の中を流動し、日没前に荒野で Macbeth に会う約束をして、姿を消す。しかも、魔女たちは、それぞれの使い魔の動物としてヒキガエルや灰色猫に言及していて、この場は魔女たちの曖昧性と神秘性、流動性を観客に印象づけるスペクタクルな要素になっている。それとともに、この作品のモチーフとも言える価値の逆転した両義性に満ちた世界を観客に印象づけている。¹

次に、第1幕第3場で、3人の魔女が荒野の端で凱旋途中の Macbeth と Banquo を待ちうけている。魔女たちは自ら運命を預かると述べているように、Macbeth について、次のように謎めいた予言をする。

1 Witch.	All hail, Macbeth! hail to thee, Thane of Glamis!	
2 Witch.	All hail, Macbeth! hail to thee, Thane of Cawdor!	
3 Witch.	All hail, Macbeth! that shalt be King hereafter.	(I. iii. 48-50)

この個所及び次に引用する個所については、Shakespeare は R. Holinshed の *The Chronicles of England, Scotland, and Ireland* の同様の奇怪な服装をした魔女らしき人物の予言にも基づいているが、さらに James 一世が1605年夏にオックスフォード大学を訪れた際に、Matthew Gwinn

博士のラテン語の催し、*Tres Sibyllae* において巫女に扮した3人の学生が王にそれぞれ上に挙げた治める3国の予言をしてもてなした話を下敷きに Macbeth と Banquo への時事的言及を含んだ予言として使っていると考えられている。² こうしたスペクタクル的な短いが生彩を放つ演出はこの劇の特色である。

魔女たちは、Banquo については次のように、彼に請われるままにその運命を話して、2人を祝福し、姿を消す。

1 Witch.	Lesser than Macbeth, and greater.	
2 Witch.	Not so happy, yet much happier.	
3 Witch.	Thou shalt get kings, though thou be none:	
	So all hail, Macbeth and Banquo!	
1 Witch.	Banquo and Macbeth, all hail!	(I. iii. 65–69)

この突然の驚愕するような予言を残した後、突然消えた魔女に対し、Banquo は“The earth hath bubbles, as the water has, / And these are of them.—Whither are they vanish’d?” (I. iii. 79–80) と問いかけ、Macbeth はこれに対し、“Into the air; and what seem’d corporal, Melted as breath into the wind. Would they had stay’d!” (I. iii. 81–82) と答えている。魔女たちには髭があり、両性具有の奇妙な存在として描かれている。風をおこし、シッポのないネズミに変身できる変容の化身として描かれており、大地の穴の中に消えることのできる空間移動のできる流動的存在であることを印象づける。⁴ Henry N. Paul は魔術的場面は単にスペクタクルな場面と言う以上の意味があり、Shakespeare は王に「血統」を示し、頂点をきわめた劇は単なるスペクタクル以上のものとなっていると述べている。この芝居は1606年8月7日、James 一世が義弟のデンマーク王 Christian をもてなすための御前公演としてハンプトンコートでの上演が初演と一般的に考えられている。⁵ Shakespeare はこの洗練された精緻な劇でもって、*The Chronicles of England, Scotland, and Ireland* にも示されている Banquo を Macbeth とは別の描き方をして祝福することにより James 一世の祖先と考えられている Banquo を称えつつ、長い芝居が不得手な王や廷臣たちの興味をスペクタクル的要素で惹きつける工夫をしていると考えられる。今引用した台詞の中でも、Macbeth は、魔女たち空気の中へ消えてしまったことにに対し、もっといてほしかったと、すでに魔女に惹きつけられている様子を示している。これに対して Banquo は冷静沈着で、魔女たちの予言に距離をおく、別の姿勢を次のように示し、Macbeth と Banquo の魔術に対する対応の対比を観客に印象づけている。

Macb. [*Aside.*] Glamis, and Thane of Cawdor:
The greatest is behind. [*To Rosse and Angus*] Thanks for your pains.—
[*To Banquo*] Do you not hope your children shall be kings,
When those that gave the Thane of Cawdor to me
Promis'd no less to them?

Ban. That, trusted home,
Might yet enkindle you unto the crown,
Besides the Thane of Cawdor. But 'tis strange:
And oftentimes, to win us to our harm,
The instruments of Darkness tell us truths;
Win us with honest trifles, to betray's
In deepest consequence.— (I. iii. 116–27)

グラームス、そしてコーダーの領主という、2つの予言のこなつた Macbeth は、Banquo に対して、「私をコーダーの領主にしてくれた者が君の子孫が王になると約束したのだから」と、“Promis'd” (I. 120) という言葉を使うことによって、偶然手に入れた称号を魔女から与えられたととらえ、すでに魔女の手の中に入って操られ始めている兆しを示し、Banquo はこれに対して釘をさし、こうした闇の世界の手先どもが語る真実の危うさについて指摘し、事の成り行きの先見性を示している。

次に宙に舞う短剣の場面へと見ていこう。第1幕第7場の最初の場面では、オーボエと松明が用意され、配膳方や食器類をもった数人の召使が通り過ぎ、これも宴会進行中の默劇となっており、上流向けの演出になっている。王をもてなす饗宴の場から抜け出した Macbeth は、次のように国王殺害という大罪について躊躇し、逡巡している。

If it were done, when 'tis done, then, 'twere well
It were done quickly: if th'assassination
Cloud trammel up the consequence, and catch
With his surcease success; that but this blow
Might be the be-all and the end-all—here,
But here, upon this bank and shoal of time,
We'd jump the life to come.—But in these cases,
We still have judgment here; that we but teach
Bloody instructions, which, being taught, return
To plague th'inventor: this even-handed Justice
Commends th'ingredience of our poison'd chalice
To our own lips. He's here in double trust:

First, as I am his kinsman and his subject,
Strong both against the deed; then, as his host,
Who should against his murderer shut the door,
Not bear the knife myself. (I. vii. 1-16)

Macbeth は、こういうことは、常にこの世で裁きが下るものであり、血なまぐさいことを誰かに教えればそれが災いとなり教えた者にはねかえってくるとし、第1に自らが Duncan の身内で臣下、第2に客をもてなす主人役であることも挙げて、自ら剣をふるうことを否定している。ここで、Duncan 殺害は剣のイメージで Macbeth の心に植えつけられており、強迫観念のように Macbeth の心に巣をはってしまう。また、Macbeth が予言した災いは劇後半で Macbeth 夫人に夢遊病という形ではねかえってくる。第2幕第1場で、Macbeth は罪を犯す前から、すでに短剣が次のように宙に舞う幻覚を見ている。

Is this a dagger, which I see before me,
The handle toward my hand? Come, let me clutch thee: —
I have thee not, and yet I see thee still.
Art thou not, fatal vision, sensible
To feeling, as to sight? or art thou but
A dagger of the mind, a false creation,
Proceeding from the heat-oppressed brain?
I see thee yet, in form as palpable
As this which now I draw.
Thou marshall'st me the way that I was going;
And such an instrument I was to use.—
Mine eyes are made the fools o'th other senses,
Or else worth all the rest: I see thee still;
And on thy blade, and dudgeon, gouts of blood,
Which was not so before.—There's no such thing.
It is the bloody business which informs
Thus to mine eyes.—Now o'er the one half-world
Nature seems dead, and wicked dreams abuse
The curtain'd sleep: Witchcraft celebrates
Pale Hecate's offerings; and wither'd Murther,
Alarum'd by his sentinel, the wolf,
Whose howl's his watch, thus with his stealthy pace,
With Tarquin's ravishing strides, towards his design
Moves like a ghost. (II. i. 33-56)

Macbeth の感覚がおかしくなったのか、まだ実行に移す前から、短剣の刃にも柄にも血のりが見える。非常に高度に幻想的な劇で、Shakespeare 後期の劇の要素を示している。魔女たちはギリシャ神話の Hecate に仕える存在として、ここでは描かれている。招き寄せる剣に導かれて Macbeth が退場しようとする、準備ができたことを知らせる夫人の鳴らす鐘の音が不気味に響く。音響と短剣のイメージの成す高度に洗練された場面となっている。実際の Duncan 殺害については幕外で行われ、後に語りの形態で観客に告知される、観客の想像力に頼った簡潔なプロットの進展する構造となっている。

第3幕第4場では、宮殿の大広間で、新しく王位についた Macbeth の祝賀の晩餐の用意がなされている。宴会の最中に Macbeth は戸口に現われた暗殺者から、“Ay, my good Lord, safe in a ditch he bides, / With twenty trenched gashes on his head; / The least a death to nature.” (III. iv. 25-27) と、Banquo を始末した際の殺害方法ではなく、彼が頭に受けた傷口の様子を報告を受ける。またこの暗殺者は第3幕第1場に記述があるように、お金で雇われた刺客ではなく、出世を望みながら運に見放された者が Macbeth の説得により、このような罪を犯すことになっていて、夫人の教唆や魔女のまやかしによって Duncan 殺害から感覚が麻痺していく Macbeth とダブルプロットになっている。出世を望みながら不運な運命をたどり、“Do you find / Your patience so predominant in your nature, / That you can let this go?” (III. i. 85-87) と、上に仕える者によって教唆され悪の連鎖にはまっていく暗殺者たちのエピソードは宮廷に奉仕している者たちにとって、比較的身近なエピソードであり、上流向けの劇に奥行きを与える要素となっている。“predominant” (l. 85) は、占星術用語で、ある星が影響力で優位を保つ状態であるが、この作品には占星術用語もところどころ駆使されている。占星術は Chaucer の作品にみられるように、昔から一部上流の人々のたしなみでもあった。夫人に宴会へ呼び戻された Macbeth は“Here had we now our country’s honour roof’d, / Were the grac’d person of our Banquo present;” (III. iv. 39-40) と Banquo 欠席について触れると、Banquo の亡霊が現れ、Macbeth の席に着いてしまう。続けて Macbeth は“Who may I rather challenge for unkindness, / Than pity for mischance!” (III. iv. 41-42) と、しらじらしく述べているが、“challenge for” (l. 41) はここでは「責める」の意で使われているが、もともと「異議を申し立てる」意の法律用語である。大事な場面の要所で法用語が使われるのは、Shakespeare 後期の作品の特徴であるとともに、観客層への作者の配慮もあると考えられる。Banquo の亡霊が王の座を占拠しているのにまだ気付かず、Macbeth は、Banquo の不実をなじりたいと言ってしまふ、諷刺的な視点を提供する場面となっている。夫人の叱咤激励も功をなさず、Macbeth が皆の前で“If chanel-houses

and our graves must send / Those that we bury, back, our monuments / Shall be the maws of kites.” (III. iv. 70–72) と、Banquo 殺害に何らかに加担しているような事を口走ってしまうと、亡霊は姿を消す。夫人からあらためて、その狂態ぶりについて男らしさがないと非難された Macbeth は次のように言い訳をしている。

Blood hath been shed ere now, i'th'olden time,
Ere humane statute purg'd the gentle weal;
Ay, and since too, murthers have been perrrform'd
Too terrible for the ear: the time has been,
That, when the brains were out, the man would die,
And there an end; but now, they rise again,
With twenty mortal murthers on their crowns,
And push us from our stools. This is more strange
Than such a murther is. (III. iv. 74–82)

この引用箇所の“statute” (l. 75) は法用語で「制定法」のことであり、“purg'd” (l. 75) 「浄化した」も法用語との関連で Shakespeare 後期の作品に使われる縁語である。大切な場面で駆使される法律用語の多さは、おそらく作者が知的上流の観客層を念頭においていることに関係すると考えられる。Banquo の傷口のイメージである、頭に20もの致命傷に至る傷口を受けても立ち上がり、椅子から人を押しのける様を殺人よりも奇怪であると口にしてしまい、廷臣たちに背景にいかがわしい事情があることを暗示してしまう。夫人から回りに臣下が客人として座していることを指摘され、“I drink to th'general joy o'th'whole table, / And to our dear friend Banquo, whom we miss; / Would he were here!” (III. iv. 88–90) と乾杯しようとする、Banquo の亡霊が再び登場し、Macbeth は取り乱し、臣下に疑いを与えてしまう。

この宴会の場の導入の意図は、不正な手段を使って王座についた Macbeth 政権の危うさと怪しさをすぐに示してしまうことにあると言えよう。この芝居の中には病気や怪我、Macbeth が見る幻影や不眠症、Macbeth 夫人の夢遊病など、心理的疾患をも含む病理に関する症状や表現、概念が比較的多く記述されている。真の統率者と悪意のある者の政権の脆弱さを対比し、後述するが、第4幕3場で言及されている Edward 懺悔王の病人を治癒させる不思議な力と、王自らが幻影を見て公式の祝賀会で取り乱してしまう精神の不調を見せる危うい Macbeth の政権を対照させることで、真の統率者の力をアピールして、James 一世におもねる意図が作者にはあったと考えられる。暴君は良き統率者と区別されなければならないという James 一世の著書に準じた見解がこの作品の中では扱われている。⁶ 現に、第3幕第6場では、Lenox に対して他の貴族が

But make amends now: get you gone,
And at the pit of Acheron
Meet me i'th'morning: thither he
Will come to know his destiny.
Your vessels, and your spells, provide,
Your charms, and everything beside.
I am for th'air; this night I'll spend
Unto a dismal and a fatal end:
Great business must be wrought ere noon.
Upon the corner of the moon
There hangs a vap'rous drop profound;
I'll catch it ere it come to ground:
And that, distill'd by magic sleights,
Shall raise such artificial sprites,
As, by the strength of their illusion,
Shall draw him on to his confusion.
He shall spurn fate, scorn death, and bear
His hopes 'bove wisdom, grace, and fear;
And you all know, security
Is mortals' chiefest enemy.
[Song within: 'Come away, come away,' etc.
Hark! I am call'd: my little spirit, see,
Sits in a foggy cloud, and stays for me. [Exit. (III. v. 14-35)

当時、魔女と交渉を持ったり、予言を受けたり、生と死に関する事や謎について聞くことは禁じられていた条項であった。⁸ 特に1580年の法令では王についての寿命を知りたがることは、王の死を望むことと同様に固く禁じられていた条項であり、全ての点で Macbeth は異端的な行為を犯していることになる。罪深き Macbeth は妖術を使って蒸留し、現れた幻にだまされて地獄に落ちていくプロットの先見性がここで示している。知恵と恵と恐れがあれば、持たないはずの野望を持って、死を蔑り、破滅の道をまっしぐらにすすんでいく Macbeth の運命があっさりと予告されている。Hecate は最後に「安心と思う心が人の敵」と締めくくると、舞台奥で歌と音楽が聞こえる構成になっている。Hecate の供の使い魔が霧の雲に乗って待っており、Hecate は歌と共に消えていく妖精的雰囲気の高い仮面劇的なスペクタクル効果の強い場面となっている。Hecate を魔女たちの師とすることにより、また、当時の魔術に関する違反行為を犯している Macbeth を懲らしめるプロットを提示することにより、魔女たちの言動はかなり異端的要素を

含むのだが、御前公演として演ずるにあたり、宗教的にはぎりぎりの許容範囲内の設定で Shakespeare は魔女たちを描いている。深刻な場面の中に陽気で短い寸劇的な要素が入ることによって、劇全体のバランスがとれ、洗練された新時代の趣向になっている。

1604年に *Gowrie* という芝居が、国王 James 一世の殺害意図をもって書かれたとして、上演禁止とされた件がある。⁹ これは国王一座が上演予定していたもので、Gowrie 伯爵はこの試みの途中で殺されたが、黒魔術に関するような証拠がいくつか見られ、これを確信していたようである。Peter Stallybrass が言うように、Shakespeare の劇団は黒魔術を使い、王への攻撃意図のある不敬な劇を上演する意図はなく、上演に関する危機を回避しようとしていたことは十分考えられる。そのため、*Macbeth* の魔女たちは黒魔術を使う魔女ではなく、古典の教養、ギリシャ神話の枠の中での Hecate に仕える魔女という設定になっていると言えよう。

III

第4幕第1場では、フォレスにある館で、中央に大釜があり、中のものが煮えたぎっている。雷が鳴り、3人の魔女が登場する。この場で見せるスペクタクルは他の場面の幻影とは少し異なっている。3人の魔女は釜の周りをぐるぐる回り、毒の臓物、イモリの目玉やカエルの指などグロテスクな奇妙なものを次のように釜の中に投げ込んでいる。

3 *Wittch.* Scale of dragon, tooth of wolf;
 Witches' mummy; maw, and gulf,
 Of the ravin'd salt-sea shark;
 Root of hemlock, digg'd i'th' dark;
 Liver of blaspheming Jew;
 Gall of goat, and slips of yew,
 Sliver'd in the moon's eclipse; (IV. i. 22-28)

こうした奇妙な大釜料理の材料の中で、引用箇所“Witches' mummy” (l. 23) は、当時ミイラの粉末は薬用になると考えられており、James 一世の *Daemonologie* にも同様の引用があり、王や一部上流層の観客の興味を引くように工夫された台詞であると考えられる。¹⁰ またこの箇所には上述の魔女のミイラの他に闇夜にぬいた毒ニンジンなど、薬草類の記述に加えて、毒性があるとされ、墓地に植えられたいちいの木の小枝の表記もあり、ハーブなどの薬草学に詳しい知識層に訴える台詞回しとなっている。また、月の欠けた晩に手折ったいちいの小枝の記述にある月

食の夜は合法の事業をするには最もふさわしくない時であり、それゆえ、悪しき計画には適した時で、土地や契約を扱う法曹関係者の興味を引く台詞であると考えられる。魔女たちが“Double, double toil and trouble:”(IV. i. 20) と増殖する呪文をかけ、大釜の用意をしていると、彼女たちの師匠である Hecate が登場して、“And now about the cauldron sing, / Like elves and fairies in a ring, / Enchanting all that you put in.” (IV. i. 41–43) と魔女たちに命じ、音楽と歌「黒い妖精」が奏でられ、Hecate と魔女たちが歌いながら退場する。音楽と踊りのあるスペクタクル性を重視した芝居の作りになっている。Ben Jonson によると、Hecate は魔術を取り仕切っていると考えられており、Shakespeare も台詞の中でそのように述べている。¹¹ そこへ、Macbeth が自分の運命をたずねるため、登場する。最初にあらわれた幻影は兜をかぶった首で、“Macbeth! Macbeth! Macbeth! beware Macduff; / Beware the Thane of Fife.—Dismiss me.—Enough.” (IV. i. 71–72) と述べ、姿を消す。第2の幻影は血まみれの子供で、“Be bloody, bold, and resolute: laugh to scorn / The power of man, for none of woman born / Shall harm Macbeth.” (IV. i. 79–81) と謎めいた予言をする。これに対して、Macbeth は次のように言い放つ。

Then, live, Macduff; what need I fear of thee?
But yet I'll make assurance double sure,
And take a bond of Fate: thou shalt not live;
That I may tell pale-hearted fear it lies,
And sleep in spite of thunder.— (IV. i. 82–86)

“make assurance double sure”(l. 83) や、“take a bond of Fate”(l. 84) など法的縁語が使われている個所である。Macbeth は念には念を入れ、運命の女神から証文を取ると豪語し、突然“bond”が台詞に出てくるが、法曹関係者には比較的身近で直観的に感じる台詞であったと考えられる。もちろん、これらは両義的で曖昧な台詞となっている。証文を取ると言っていること自体、こうした幻影に対して、疑念をいだいていることを、自らが揺らいでいることを示していると言えよう。

3番目の幻影は、手に木の枝を持ち、王冠を戴いた子供で、次のように、謎めいたことを言う。

Be lion-mettled, proud, and take no care
Who chafes, who frets, or where conspirers are:
Macbeth shall never vanquish'd be, until
Great Birnam wood to high Dunsinane hill
Shall come against him. (IV. i. 90–94)

第2、第3の幻影はそれぞれ2枚舌で謎かけをし、Macbeth を安心させ、高慢にする。第1の首は Macbeth の分身の兆しとして、第2の血まみれの子供は、帝王切開により生まれたと豪語する Macduff を示唆し、第3の幻影の手に木の枝を持ち、額には王のしるしをつけた子供は Malcolm を暗示すると考えられる。謎めいた答えに納得しながらも、胸がざわつく Macbeth は、“tell me (if your art / Can tell so much), shall Banquo’s issue ever / Reign in this kingdom?” (IV. i. 101–03) と問いたです。すると、8人の王の幻影が現れる。最後の王は手に鏡を持つ、凝った趣向で、その後に、Banquo が続く。これを見て、Macbeth は次のように狼狽した台詞を口にする。

Thou art too like the spirit of Banquo: down!
Thy crown does sear mine eye-balls:—and thy hair,
Thou other gold-bound brow, is like the first:—
A third is like the former:—filthy hags!
Why do you show me this?—A fourth?—Start, eyes!
What! will the line stretch out to th’ crack of doom?
Another yet?—A seventh?—I’ll see no more:—
And yet the eighth appears, who bears a glass,
Which shows me many more; and some I see,
That two-fold balls and treble sceptres carry.
Horrible sight!—Now, I see, ’tis true;
For the blood-bolter’d Banquo smiles upon me,
And points at them for his.—What! is this so? (IV. i. 112–24)

鏡を手にした8番目の王とは、Mary Stuart ではなく、James 一世であると考えられる。George Walton Williams はこの場面でジェイムズ朝の観客は Banquo が指さす近年の歴史上の人物に Stuart 王朝の9番目の王がこの瞬間にイングランド王の座についていることを認識したであろうと述べている。¹² Duncan の亡霊でなく、Banquo の亡霊が出現することについて Walton Williams は、Banquo が James 一世の祖先であり、王は直系の系譜を強調していたためとみなしている。¹³ 舞台上の8番目の王はイングランド王とスコットランド王としての王玉を2つと、イングランド、スコットランド、アイルランド3国統治を意味する王笏を持って現れる。鏡は未来を映し出す魔法の鏡でもあり、合わせ鏡に無数の王が映し出され、Macbeth を驚愕させる。あるいは、Arden 版の註にあるように、観客席の James 一世を映し出し、王を喜ばせる派手で凝った演出もふさわしいスペクタクル性の高い黙劇となっている。¹⁴ 髪に血のりのついた Banquo が、これが自分の子孫だと指さして、Macbeth をあざ笑っているアイロニカルな場面である。新種の演出と歴史認識が絡み、最も諷刺的で幻想的な場面になっていると言えよう。Macbeth

は魔女にそのとおりなのかとたずねると、魔女たちは音楽に合わせて踊り、消えてしまう。Macbeth は“Infected be the air whereon they ride; / And damn'd all those that trust them!” (IV. i. 138–39) と言い、自分で自らをそれと気付かずに呪う台詞を述べてしまう。自虐的でひねったアイロニカルな台詞になっている。これまでの魔女の示す言葉は両義性があり、曖昧であったが、この8人の王の幻影の場面は比較的メッセージがはっきりしている。Macbeth はこの場のスペクタクルを通して、次に独白するように、悟っていく。

Macb. [*Aside.*] Time, thou anticipat'st my dread exploits:
The flighty purpose never is o'ertook,
Unless the deed go with it. From this moment,
The very firstlings of my heart shall be
The firstlings of my hand. And even now,
To crown my thoughts with acts, be it thought and done:
The castle of Macduff I will surprise;
Seize upon Fife; give to th' edge o' th'sword
His wife, his babes, and all unfortunate souls
That trace him in his line. No boasting like a fool;
This deed I'll do, before this purpose cool:
But no more sights!—Where are these gentlemen?
Come, bring me where they are. [*Exeunt.*
(IV. i. 144–56)

これらの幻影はこれまでは Macbeth の恐れや躊躇する気持ちとともに彼の野望も具現化する手段であったが、8人の王の幻影を見て、Macbeth は、もはや恐れや躊躇はせず、思考を行動で仕上げるべく、思ったらすぐにやると誓っている。Macduff の城に奇襲をかけ、ファイフをおさえ、幻には用はないと豪語する。以前のように、男らしさという美徳の知的一面でもある思考と逡巡をすることもなく、感覚が麻痺し、冷酷な殺人鬼へと墮落していくあわれな自らの役回りについて悟っていく伏線となっている。

IV

幻影を見てしまった Macbeth が自ら行動し始め、夫人の支配から離れると、Macbeth 夫人は夢遊病に陥り、病理的立場は Macbeth と逆になってしまう。この章では魔女の定義と、Macbeth 夫人と魔女との係りについて分析してゆきたい。Peter Stallybrass は Macbeth に登場する魔女

たちをギリシャ神話の魔術を行う運命を司る3女神、あるいは北欧神話のノルンに16世紀から17世紀のヨーロッパの多く社会における土地特有のものが入っていると分析している。¹⁵ Holinshed の *The Chronicles of England, Scotland, and Ireland* ではさらに曖昧で、運命の3女神、あるいは、ニンフまたは妖精、奇妙な服装をした3人の女となっている。¹⁶ Paul はスコットランドの土着の魔女と見ている。¹⁷ この作品に現れる魔女についてまとめてゆこう。魔女たちは作品冒頭から奇妙な言い回しで、謎かけをし、未来を予測し、霧とよどんだ空気の中で消えてゆく、曖昧性と流動性を持った存在として描かれており、この悪意を含んだ二重の見通しを劇の中に浸透させ、悪を増殖させ、社会の中の秩序を混乱させ、主人公 Macbeth を破滅へと導いてゆく媒体である。ただし、この作品の魔女はスコットランドの民間伝承の魔女についての要素も入れながらも、宮廷上演などの制約から、黒魔術を使う邪悪な魔女というよりは、Hecate に仕えるギリシャ神話の枠の中の運命の3女神という設定になっていると言えよう。

Macbeth 夫人は劇の初めから、夫への呼びかけも魔女と同様の言い回しをして、次のように彼女の望み通り Macbeth を国王殺害へと導いていく意図をあらわにしている。

Glamis, thou art, and Cawdor; and shalt be
What thou art promis'd.—Yet do I fear thy nature:
It is too full o'th'milk of human kindness,
To catch the nearest way. (I. v. 15–18)

Hie thee hither,
That I may pour my spirits in thine ear,
And chastise with the valour of my tongue
All that impedes thee from the golden round,
Which fate and metaphysical aid doth seem
To have thee crown'd withal. (I. v. 25–30)

夫人は最初から Duncan 殺害を念頭においている点でもこれに躊躇する Macbeth とは異なり、国王殺しを望んだという点において、すでに1580年の魔術に関する法令に反している。さらに、Macbeth 夫人は次のように、悪霊を呼び出している。

The raven himself is hoarse,
That croaks the fatal entrance of Duncan
Under my battlements. Come, you Spirits
That tend on mortal thoughts, unsex me here,

And fill me, from the crown to the toe, top–full
Of direst cruelty! make thick my blood,
Stop up th’access and passage to remorse; (I. v. 38–44)

Macbeth 夫人は殺意に仕える悪霊を呼び出し、自分の中に入ってくるよう呼びかけ、私を女でなくしておくれと述べており、頭から爪先までおぞましい残忍さで満たしてほしいと願っている。Stallybrass は Macbeth 夫人が魔女に変わった時の、強勢の変化に注意することは大切であると述べているが、夫人は最初に登場した時から、魔女と同様の言い回しや、表現を使っていると言えよう。¹⁸ R. A. Foakes は、Macbeth 夫人は第1幕第5場の恐ろしい独白において、自ら魔女へと変容しているとのべている。¹⁹ こうした悪霊の呼び出しを含む祈願も、本来の女性らしさを排除する願いもまた邪悪な行為であり、魔女としての一面として分析できるであろう。さらに、Macbeth が登場すると、次のように述べている。

Great Glamis, worthy Cawdor!
Greater than both, by the all–hail hereafter!
Thy letters have transported me beyond
This ignorant present, and I feel now
The future in the instant. (I. v. 54–58)

手紙を読んで、何も知らない現在を飛び越え、いまこの瞬間も未来の中にいる気がする、夫人は魔女たちと同様、時空を超えることを述べていて、これも魔術や予告に関するタブーな行為であり、魔術に関する法令にふれる邪悪な行いとして Macbeth 夫人は十分に魔女の系譜に属するものとして考えられると言えよう。Macbeth が Duncan 殺害について躊躇すると、夫人は Macbeth の弱点を知りつくし、夫に対して次のように述べる。

Lady M. Was the hope drunk,
Wherein you dress’d yourself? Hath it slept since?
And wakes it now, to look so green and pale
At what it did so freely? From this time
Such I account thy love. Art thou afeard
To be the same in thine own act and valour,
As thou art in desire? Would’st thou have that
Which thou esteem’st the ornament of life,
And live a coward in thine own esteem,
Letting ‘I dare not’ wait upon ‘I would,’

Like the poor cat i'th'adage?
Macb. Pr'ythee, peace.
I dare do all that may become a man;
Who dares do more, is none.
Lady M. What beast was't then,
That made you break this enterprise to me?
When you durst do it, then you were a man;
And, to be more than what you were, you would
Be so much more the man. Nor time, nor place,
Did then adhere, and yet you would make both:
They have made themselves, and that their fitness now
Does unmake you. I have given suck, and know
How tender 'tis to love the babe that milks me:
I would, while it was smiling in my face,
Have pluck'd my nipple from his boneless gums,
And dash'd the brains out, had I so sworn
As you have done to this. (I. vii. 35-59)

Macbeth 夫人はあらゆる手練手管を使い、夫の愛に訴えたり、「臆病者」と叱咤激励したりしながらも、**Macbeth** が一番気にする「男らしさ」について言及し、痛いところをつく。そして、一旦やると誓ったならば、授乳中の赤ん坊の脳みそを叩き出してしてみせると豪語し、明らかにグロテスクで魔女的な側面を印象づけている。こうした表現は劇後半魔女たちが大釜の中へ臓物などの材料を投げ込む台詞を彷彿とさせ、魔女たちのイメージリーとつながっていると言えよう。この芝居の中で夫人は、家父長制度の社会構造の中で夫を支配し、国王殺しに加担させていく意味でも、女性的な特性を抹殺しようとしている意味においても、男性中心の権威社会の中の異端者であり、十分に魔女的な存在である。また、劇の構造の中でも、彼女は先に引用した箇所ですべての悪意につきそう悪霊を呼び出して自分の中に入るよう求めて自分の願望を **Macbeth** に実現させようとしており、魔女が乗り移ったかのように魔女と等しい働きをしている。もともと **Macbeth** には国王殺しの理由が明白でないが、年代記によると、夫人には王妃になりたいという願望が明白であり、史実によれば、**Macbeth** は王家の出身であり王位継承も2番目になっていて、王位篡奪の理由があってもおかしくないが、この辺の事情を **Shakespeare** は国王一座の座付き作家として、御前興行にあたり、省いている。²⁰

作品の中で **Macbeth** は夫人のために王位篡奪を計画してゆく。劇後半で彼女について **Malcolm** が“his fiend-like Queen” (V. ix. 35) と形容しているように、**Macbeth** 夫人は社会構造の中で

も忌避されるべき存在として、魔女と同等視されているばかりか、劇構造の中でも魔女とつながって機能していると考えられる。そのため、Macbeth を使って、王位篡奪の目的を果たした夫人は、Macbeth を滅ぼす女として、彼女は自分の病気の中で滅びていく。第5幕第1場の夫人の夢遊状態の場面を見ていくことにする。医師から夫人が夢遊状態で歩く時に話す内容を“In this slumbry agitation, besides her walking and / other actual performances, what, at any time, have / you heard her say?” (V. i. 11–13) と尋ねられた侍女は医師に対してすら、“Neither to you, nor any one; having no witness to / confirm my speech.” (V. i. 16–17) と彼女の発言を保証してくれる証人がいない限り話せないと、法的手段に訴える賢明な対応をしている。この個所の“witness” (l. 16) も“confirm my speech” (l. 17) も法的縁語であり、侍女の抜け目のない秘密主義も宮廷的対応である。患者の病状を心理面も含めて知ることができるのは、医者の特権であり、この個所は Shakespeare の法的知識を利用した台詞と Arden 版註にもあるが、もし、医師が侍女を裏切ったら、侍女は Macbeth 夫人の発言に対して反逆の罪を犯したことになり、Arden 註はありそうもないこととしているが、疑心渦巻く宮廷では、あり得ることかもしれない、そういった猜疑心に満ちた世界もこの劇の特色であると言えよう。²¹ そこへ蠟燭をもった夫人が現れ、手をこすりあわせて次のようにささやく。

Lady M. Out, damned spot! out, I say!—One; two:
why, then 'tis time to do 't.—Hell is murky.—Fie,
my Lord, fie! a soldier, and afeard? —What need
we fear who knows it, when none can call our power
to account? —Yet who would have thought the old
man to have had so much blood in him?
Doct. Do you mark that?
Lady M. The Thane of Fife had a wife; where is she
now?—What, will these hands ne'er be clean?—
No more o'that, my Lord, no more o'that; you mar
all with this starting.
Doct. Go to, go to: you have known what you should not.
Gent. She has spoke what she should not, I am sure of
that: Heaven knows what she has known.
Lady M. Here's the smell of the blood still: all the
perfumes of Arabia will not sweeten this little hand.
Oh! oh! oh! (V. i. 33–49)

この Macbeth 夫人の夢遊病の場面は、見世物的要素のある劇中劇になっている。夫人は夫を支

配するチャンスを失い、自らが作り出す悪夢の中でのみ、夫を支配することができる。夢の中では、夫を牛耳り、夫の意気地なさを叱咤激励している。そして **Duncan** の体中の血のイメージから逃れられないでいる。劇前半では冷静であり、女らしさを排除してきた夫人であったが、夢の中では、ファイフの領主の妻を気につけ、手が汚れたままであることを、血のにおいがアラビアの香水をかけても消えないことを嘆いている。視覚と嗅覚の感覚を使った表現は後期 **Shakespeare** の劇の特色であるが、夫人が言及するアラビアの香水は、東方交易とともにアラビアやインドから輸入された高価な女性の愛用品で、上流趣味を反映し、この作品の特色ともなっているとともに、消し去ってきた女らしさが無意識の世界に反映され、夫人の弱さを映し出している。王位奪還までは一心同体で事にあたってきた **Macbeth** 夫妻であったが、夫が夫人の手を離れて自分で行動し始めると、夫人は夢遊状態で歩きはじめ、抹殺していた女らしさが夢の中に出てしまい、病の中に埋没してしまう。**Macbeth** 夫人は家父長制度の中では、**Cleopatra** 同様、男性を支配し、秩序を崩壊させる魔女、異端者であり、忌避されやがては滅びていく存在である。**Macbeth** 夫人にも、**Macduff** 夫人にも名がないのは、それぞれ抽象化され、矮小化されているためではないかと考えられる。²² **Macbeth** の世界はこの2人以外は全て男性が登場する男性中心の社会になっており、その中で **Macbeth** 夫人は男性秩序を崩壊させる魔女、悪妻として、**Macduff** 夫人は秩序を守る良妻として、抽象化されており、**Macbeth** 夫人がやましい気持ちの現れか、病の中で自ら滅びていくのに対し、**Macduff** 夫人は **Macbeth** の悪政の犠牲になって暗殺者によってその生涯を閉じるが、その直前の息子との会話は信頼関係にあふれている。本来であれば、母が息子を守るはずが、息子に守られて亡くなっていく、崩壊した秩序の象徴となっている。

V

これまで見てきたように、**Macbeth** 夫人には魔女的な特性が見られ、彼女は家父長制という社会の中でも、劇構造の中でも魔女と繋がって機能していた。魔術は **Bodin** を含む当時の最も知的な影響力のある解釈で、悪魔信仰は **James** 一世の政治理念が拠り所とする秩序ある神秘的知識の前提でもあった。²³ イングランドの統治は少なくとも1300年以来、魔女との関わりを持ち、**Stallybrass** は **Macbeth** における魔術は家父長制社会の指導権の正当性を示すものであり、こうした点において特に機能していると述べている。²⁴ この劇の中では魔女の登場する場面での雷鳴や稲妻の他にも自然界の不思議な兆候が報告されている。第2幕第4場で、**Rosse** と老人が、

Duncan 殺害の夜の悪天候や自然界の異変を次のように語っている。

Old M. Threescore and ten I can remember well;
Within the volume of which time I have seen
Hours dreadful, and things strange, but this sore night
Hath trifled former knowings.

Ross. Ha, good Father,
Thou seest the heavens, as troubled with man's act,
Threatens his bloody stage: by th' clock 'tis day,
And yet dark night strangles the travelling lamp.
It's night's predominance, or the day's shame,
That darkness does the face of earth entomb,
When living light should kiss it?

Old M. 'Tis unnatural,
Even like the deed that's done. On Tuesday last,
A falcon, towering in her pride of place,
Was by a mousing owl hawk'd at, and kill'd.

Ross. And Duncan's horses (a thing most strange and certain)
Beauteous and swift, the minions of their race,
Turn'd wild in nature, broke their stalls, flung out,
Contending 'gainst obedience, as they would make
War with mankind.

Old M. 'Tis said, they eat each other.

Ross. They did so; to th' amazement of mine eyes,
That look'd upon't. (II. iv. 1-20)

老人と Rosse は Duncan 殺害の昨夜の事件と同様に、昼なのに暗闇が大地の面を埋葬し、空を舞っていた鷹がフクロウに襲撃されて殺され、Duncan の名馬中の名馬が野性に戻り、人に戦いをしかけるように厩を破って飛び出し共食いしたことを語っている。人の世の秩序と同様、自然界の秩序も Macbeth を意味する名馬の暴走同様に乱れ、制御がきかなくなっていることを印象づける。この引用箇所は Macbeth の王位篡奪を示唆する語りでもあるが、劇の枠として、最初に魔女たちの曖昧で両義性に満ちた台詞があるため、自然界の乱れも魔女たちが仕切る秩序の転覆の表象、あるいはイメージアリーとしてとらえることができよう。こうした恐ろしい自然の兆候は劇の中であらゆるところにちりばめられており、主筋のダブルプロットとして、また魔女たちが行う秘儀の兆候として機能している。さらに、Rosse の語る「昼だが、闇夜が空を回る明かりの首を絞めてしまった」暗い空の様子など、この個所も代称（ケニング）が使われ、読みにくい。

さらに、“predominance” (I.8) は既に述べたように、占星術用語である。他にも、“disasters” (III. i. 111) 「星や天体の不吉な影響力」も Macbeth と暗殺者の台詞の中で使われている占星術用語であり、上流層向きの劇に奥行を与える設定となっている。また、この劇作品には法律用語が使われているが、その例示としては、“suborn’d” (II. iv. 24) 「賄賂などで買収された」、*“affeer’d”* (IV. iii. 34) 「法的に認められた」、*“impediments”* (IV. iii.64) 「契約上の法的障害」、*“interdiction”* (IV. iii. 107) 「禁治産宣告」、*“accus’d”* (IV. iii. 107) 「告発して」、*“warranted”* (IV. iii. 137) 「法的に正当化された」や、“a fee-grief” (IV. iii. 196) 「一個人の悲しみ」等挙げることができる。最後の“a fee-grief” (IV. iii. 196) は、法律用語“fee-simple” 「無条件相続地権」からの造語である。²⁵ Macbeth 夫人の言う“*But in them [Banquo and Fleance] Nature’s copy’s not eterne.*” (III. ii. 38) 「でも、あの2人だって自然の女神から借りた命の貸借期間は永遠ではない」の“copy” も法律用語であり、膳本保有権のある土地の貸借期間のことである。これに対する Macbeth の台詞 “*And, with thy bloody and invisible hand, / Cancel, and tear to pieces, that great bond / Which keeps me pale!*” (III. ii. 48-50) は、「夜の血に飢えた見えない手で、俺を青ざめさせるあいつらの命の証文を無効にし、ずたずたに引き裂いてくれ」とこれに対応しており、自然の女神から借りている命の証文を無効にする法律に関するメタファーで夫人の台詞とつながっている。ここでは“Cancel” (I. 49)、“bond” (I. 49) が法用語だが、プロットの大切な個所に突然法律用語が出てきて、奇異な感じを与える。さらに、この作品の中には怪我や心理的な疾患、先に述べたように、薬草学や病気を治癒する方法についての記述もある。怪我については劇最初、第1幕第2場に登場する満身創痍で血まみれの兵士の描写や、Banquo の脳に受けた傷口の描写が挙げられる。また、Macbeth 自身、Duncan の傷口について、次のように語っている。

Here lay Duncan,
His silver skin lac’d with his golden blood;
And his gash’d stabs look’d a breach in nature
For ruin’s wasteful entrance: there, the murderers.
Steep’d in the colours of their trade, their daggers
Unmannerly breech’d with gore. (II. iii. 109-14)

この個所は Macbeth が王の部屋付きの者を殺害してしまった言い訳の一部であるが、Duncan 王の血潮でレース模様がついたイメージは後に Macbeth 夫人の夢の中で妄想として引き継がれ離れなくなってしまう。心理的疾患としては、Macbeth の不眠症や、彼が罪を犯した後に幻影を見てしまう症状、Macbeth 夫人の夢遊病などが挙げられる。Macbeth に対して決起した貴族

たちには Macbeth 本人が病んでいることを次のように述べている。

Cath. He cannot buckle his distemper'd cause
Within the belt of rule.

Ang. Now does he feel
His secret murders sticking on his hands;
Now minutely revolts upbraid his faith-breach:
Those he commands move only in command,
Nothing in love: now does he feel his title
Hang loose about him, like a giant's robe
Upon a dwarfish thief.

Ment. Who then shall blame
His pester'd senses to recoil and start,
When all that is within him does condemn
Itself, for being there?

Cath. Well; march we on,
To give obedience where 'tis truly ow'd:
Meet we the med'cine of the sickly weal;
And with him pour we, in our country's purge,
Each drop of us. (V. ii. 15-29)

Macbeth の精神が病んでむくみ、自制心が利かず、彼のやつれた五感が発作を起こしてひるむ様が語られている。この引用箇所“med’cine”(I. 27) は医師の意味で用いられている。²⁶ Cathness は、この状況に対して、正当な君主、Malcolm に服従の義務を果たし、病んだ国家を治療する医者を迎え、この国を浄化するため、血を一滴一滴惜しみなく流すことを提言している。国王が病める国家を癒す名医という概念の表現は James 一世におもねるものであると考えられる。また、Macbeth の悪政の犠牲になり、妻子を失った個人的な悲しみに苦しむ Macduff に対して、彼を癒す治療方法として Malcolm も “Let’s make us med’cines of our great revenge, / To cure this deadly grief.” (IV. iii. 214–15) と述べ、悲しみの致命傷を癒す復讐という薬として、ここでは、薬のメタファーが用いられ、崩壊寸前の国政同様個人を治療するイメージで語られている。

この劇の中では、さまざまな二項対立がなされているが、医師もスコットランドの **Macbeth** 夫人の侍医と **Edward** 懺悔王の治療を語るイングランドの医師が登場し、それぞれの治療の状態で、国政の在り方を暗示する。第5幕第3場で **Macbeth** は **Macbeth** 夫人の侍医と次のように彼女の病状について相談している。

Doct. Not so sick, my Lord,
As she is troubled with thick-coiming fancies,
The keep her from her rest.

Macb. Cure her of that:
Canst thou not minister to a mind diseas'd,
Pluck from the memory a rooted sorrow,
Raze out the written troubles of the brain,
And with some sweet oblivious antidote
Cleanse the stuff'd bosom of that perilous stuff
Which weighs upon the heart?

Doct. Therein the patient
Must minister to himself.

Macb. Throw physic to the dogs; I'll none of it.—
Come, put mine armour on; give me my staff.—
Seyton, send out—Doctor, the Thanes fly from me.—
Come, sir, despatch.—If thou couldst, Doctor, cast
The water of my land, find her disease,
And purge it to a sound and pristine health,
I would applaud thee to the very echo,
That should applaud again.—Pull't off, I say.—
What rhubarb, cyme or what purgative drug,
Would scour these English hence?—Hear'st thou of them?
(V. iii. 37–56)

Macbeth が提示する夫人への治療法は分析的で理論的であり、薬を使う療法であるが、侍医は病気というよりは妄想に悩んでいるので患者が自分で手当てしないと治らないと、治癒不可能であることを告げている。にべもなく、治療の願いを退けられた Macbeth は医術など犬にくれてしまえと豪語するが、すぐに態度が豹変し、侍医にこの国の尿検査をして国の病状を診断し、下剤で洗浄して元の健康体に戻してくれたら、医師の称賛をあちこちにこだまさせるようにすると申し出る。さらに、ダイオウかセンナかイングランド軍を洗い流してくれる下剤はないかと口にする。この個所で引用されているダイオウもセンナも当時下剤として用いられていた植物であるが、“purge” (l. 52) やその縁語、またあまり上品でない表現は当時流行していた Jonson などの諷刺喜劇で用いられた表現であり、一部知的上流の観客層を念頭においた表現でもある。この作品の中では怪我や精神的疾患、薬や治療法などの表現がプロットの進展の中で様々なメタファーと絡み合いながら使われている。ちなみに Macbeth に付き添う従者の Seyton はここで初めて名が出るが、当時の観客にとって、その発音から Satan を連想させたことは想像に難くない。²⁷

病んだ Macbeth は国政あるいは戦略方法を、本来であれば軍師または重臣に求めるのが方策であるが、誤って医師や医術に求めている。侍医はこれに対して“*Ay, my good Lord: your royal preparation / Makes us hear something.*”(V. iii. 57–58)と煙に巻く曖昧な表現でかわし、“*Were I from Dunsinane away and clear, / Profit again should hardly draw me here.*”(V. iii. 61–62)と傍白でささやき、Macbeth を見捨てて出て行ってしまふ。

スコットランドとは対照的に、イングランドの医師については、第4幕第3場、イングランド国王の宮殿の一室で、Malcolm と Macduff との間で老 Siward がスコットランドに向けて一万の精鋭を率いて出発した報告がなされた後、医師が登場し、次のように語られている。

Mal. Well, more anon.
Comes the King forth, I pray you?
Doct. Aye, Sir; there are a crew of wretched souls,
That stay his cure: their malady convinces
The great assay of art; but at his touch,
Such sanctity hath Heaven given his hand,
They presently amend.
Mal. I thank you, Doctor.
[Exit Doctor.]
Macd. What's the disease he means?
Mal. 'Tis call'd the Evil:
A most miraculous work in this good King,
Which often, since my here-remain in England,
I have seen him do. How he solicits Heaven,
Himself best knows; but strangely- visited people,
All swoln and ulcerous, pitiful to the eye,
The mere despair of surgery, he cures;
Hanging a golden stamp about their necks,
Put on with holy prayers: and 'tis spoken,
To the succeeding royalty he leaves
The healing benediction. With this strange virtue,
He hath a heavenly gift of prophecy;
And sundry blessings hang about his throne,
That speak him full of grace. (IV. iii. 139–59)

いかなる医術でも治せない“the Evil” (l. 147)「王の病」と言われる瘰癧を Edward 懺悔王が手を触れられるだけで治癒することが語られている。この病は結核性頸部リンパ節炎“scrofula”のことで、王が患者の首に金貨をかけてやり、聖なる祈りを唱えるだけで治療から見放された病人

を治してしまう、王が行う不思議な奇跡が言及されている。²⁸ 王はこの恵の治癒力を後継者に伝えと言われており、この秘儀のほかにも、予言能力を天から授かっており、さまざまな神の祝福が玉座にあることが語られ、王の徳の高さを讃える台詞で終わっている。イングランドの宮廷では、治療が、医者さえ匙を投げた患者を治す王の行う不思議な奇跡、秘儀として印象づけられ、そこには神の恩寵があふれるものとして信じられている。**Edward** 王が舞台には登場しない語りの形態で言及されているだけに、王が医術など犬に暮れてしまえと豪語するスコットランドの宮廷との違いが浮き彫りにされている。ここで言及されている王の行う不思議な治癒能力は王の神性と癒しの力としての政治的なプロパガンダ機能を持ち、神聖な王と悪政を行う王とを際立たせることで **James** 一世におもねる意図があったと考えられる。さらに、これらのエピソードは **Macbeth** に対抗するための進軍の準備がますます増し、そうした行動が神聖なものであることを示している。

VI

これまで見てきたように、*Macbeth* はスペクタクルや默劇、魔女が執り行う魔術的場面などの際立った洗練された、精緻な劇であり、台詞や概念には貴族主義的傾向が見られた。この作品の特異性についてまとめてゆきたい。**Kenneth Muir** は **Antony** や **Cleopatra** は敵対する人物からの称賛の言葉があるのに対し、*Macbeth* には彼についてそのように語ってくれる人物がいないことを指摘している。²⁹ *Macbeth* は、そのような非常にあっさりした、一歩離れた距離感のある上流向きの劇なのではないかと考える。現に、夫人が亡くなった知らせを受けたときも、*Macbeth* は“*She should have died hereafter :*” (V. v. 17) と述べるだけで、“*Life’s but a walking shadow;*” (V. v. 24) と悟り、さらに“*it is a tale / Told by an idiot, full of sound and fury, / Signifying nothing.*” (V. v. 26–28) と虚無感をあらわにしている。先に挙げたように *Macbeth* 夫人にも *Macduff* 夫人にも名前がなく、抽象化された概念の登場人物が家父長制社会の中で、イメージに準じた役割をあっさりと演じている。*Macbeth* の最期については、彼の信奉する、女から生まれた者に滅ぼされることはないという信念が、*Macduff* が月足らずで帝王切開によって生まれたという事実をつきつけられると、*Macbeth* の魔力も切れ、気力がすっかり萎えてしまうが、“*Though Birnam wood be come to Dunsinane, / And thou oppos’d, being of no woman born, / Yet I will try the last.*” (V. viii. 30–32) と自分の役割を悟ることでもたらされる。*Macbeth* と *Macduff* は戦いながら退場し、再び登場して、*Macbeth* が敗れる。退却ラッパがな

って、続いてファンファーレともに、鼓手、旗手とともに Malcolm、老 Siward、Rosse、領主たちや兵士たちも登場するが、Siward の息子の男らしい最期が称賛されるだけで、誰も Macbeth の最期の戦いぶりを褒め称える者はいない。Macduff が Macbeth の首を持って登場し、Malcolm に向かって“Hail, King! for so thou art. Behold, where stands / Th’usurper’s cursed head: the time is free.” (V. ix. 20–21) と述べ、ここで Macbeth の篡奪者としてのこの劇の中での役割が再認識されると言えよう。劇の中で Macbeth の最期を称賛する者がいないのは、この劇の初演が御前公演であったことや、Shakespeare の劇団が国王一座として、James 一世の Stuart 王朝の祖先であるとされる Banquo や Malcolm 王子の系譜への配慮もあり、あっさりとは削除したのではないかと考えられる。Barbara Everett は、Shakespeare は最終幕において獣のように不合理で永遠の Macbeth を示したが、それでも我々は彼に純粋な人間の共感を持ち続け、彼の運命と我々の運命を結び付けて考えると述べているが、この作品はもう少し歩離れた距離感をおいた抽象化された宮廷風の特徴を持つ作品なのではないかと考える。³⁰ この劇の中には、法律用語や占星術に関する表現に加えて、怪我や精神的疾患、薬草学や治癒法などの表現がなされ、魔女がとりしきる魔術的場面がスペクタクルや黙劇の形で劇中劇として演じられ、その中で神聖な王の行う健全な国家と不思議な力が悪政を行う王と病んだ政体の対比で展開され、これに医術や治癒のメタファーが関連して述べられていた。イングランドとスコットランドの2国の王と2国の医師、2人の正反対の女性など、二項対立がなされる中で、特に Edward 懺悔王の不思議な治癒能力に関する台詞は Edward 王が舞台に登場せず、語りの形態で示されるだけに Macbeth との対照が鮮明で、明らかに James 一世の政治的プロパガンダとしての機能を持つ台詞であると言えよう。登場人物はあえて生彩を欠き、抽象化された遠景化された表現になっていると考えられる。

Muir はこの劇を道徳劇の最もすぐれた作品と見ていて、また Foakes も同様に道徳劇と見ている。³¹ Eugene M. Waith は Macbeth は狭義の「男らしさ」に沿った勇気ある兵士として死を迎えたとみなしている。³² しかし、筆者は Macbeth が夫人亡き後に語る人生についての虚無感に満ちた台詞や Malcolm や Macbeth の猜疑心や、劇構造の中でも、家父長制度の中でも異端として魔女と繋がって機能する Macbeth 夫人のグロテスクな言動など際立っており、作品としては、Shakespeare 後期の作品の特徴を持つと考える。その特色とは、Macbeth 夫人や魔女の両義性ある台詞や婉曲語法、悪魔学を引き合いに出しながら、神聖な王の威光を示す台詞など、法律用語や法用語の縁語なども使い、宮廷人や法曹関係者など一部上流の観客層が聞けば洞察力で思い当たる節のある台詞がちりばめられている点である。運に見放された者が Macbeth の甘言

によって、暗殺者となっていくように、*Macbeth* も自分では望まないのに、魔女や *Macbeth* 夫人の扇動によって、*Duncan* 殺害から次々と罪を犯して転落していくアイロニカルな悲劇であり、默劇や鏡を使った新種の趣向や *Hecate* のとりしきる仮面劇的な場面及び大釜の場面の視覚的効果は、この作品が上流観客層を念頭において、諷刺喜劇や仮面劇の趣向を取り入れていることを示していると考えられる。*Macbeth* は宮廷風上演を考慮して、極めて短いが、様式化の進んだ非常に洗練された精緻な劇であり、ジェイムズ朝の仮面劇の趣向を取り入れた諷刺的な悲劇とも言える作品なのである。

N O T E S

- 1 本稿での *Macbeth* の引用は全て、Kenneth Muir (ed.), *The Arden Shakespeare: Macbeth* (London: Methuen, 1951; rpt. 1997)を用いた。
- 2 Geoffrey Bullough, (ed.) *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* (London: Routledge and Kegan Paul, 1973), VII, pp. 494–95; Muir, p. xxiii.
- 3 Cf. Muir, p. 12. notes, l. 11.
- 4 Henry N. Paul, *The Royal Play of Macbeth* (New York: Octagon Books, 1948), p. 3.
- 5 Paul, p. 1; Muir, p. xxiii.
- 6 Cf. Peter Stallybrass, “*Macbeth* and Witchcraft,” in *Focus on Macbeth*, ed. John Russell Brown (London: Routledge & Kegan Paul, 1982), p. 193.
- 7 Muir, p. xxx.
- 8 Peter, p. 191; Paul, p. 7.
- 9 Stallybrass, p. 192.
- 10 Cf. Muir, p. 107.
- 11 Cf. Stephen Orgel (ed.) , Ben Jonson, *Selected Masques* (New Haven: Yale Univ. Press, 1970), p. 360.
- 12 George Walton Williams, “*Macbeth*: King James’s Play,” *South Atlantic Review*, 47. 2 (1982), p. 19.
- 13 Walton Williams, p. 18.
- 14 Cf. Muir, p. 114, notes, l. 118.
- 15 Stallybrass, p. 189.
- 16 Bullough, pp. 494–95.

- 17 Paul, p. 5.
- 18 Peter, p. 197.
- 19 R. A. Foakes, “Images of Death: Ambition in *Macbeth*,” in *Focus on Macbeth*, ed. John Russell Brown (London: Routledge & Kegan Paul, 1982), p. 14.
- 20 Cf. Bullough, p. 496; R. J. Adam, “The Real Macbeth: King of Scots, 1040–1054,” *History Today*, 7 (1957), p. 382.
- 21 Cf. Muir, p. 138, notes, ll. 16–17.
- 22 Cf. Barbara Everett, “*Macbeth*: Succeeding,” in *Young Hamlet: Essays on Shakespeare’s Tragedies* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1989), p. 98. Barbara Everett も *Macbeth* 夫人にファーストネームがないのを指摘している。
- 23 Peter, p. 192.
- 24 Peter, p. 190.
- 25 Cf. A. R. Braunmuller (ed.), *The New Cambridge Shakespeare: Macbeth* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1997), p. 230, notes, ll. 198–89.
- 26 Cf. Muir, p. 143. notes, l. 27.
- 27 Cf. Muir, p. 146, l. 29.
- 28 Cf. Muir, p. 131, notes, l. 146.
- 29 Muir, p. xliii.
- 30 Everett, p. 105.
- 31 Muir, p. lxxv; Foakes, p. 10.
- 32 Eugene M. Waith, “Manhood and Valor in Two Shakespearean Tragedies,” *ELH*, 17 (1950), p. 268.